



KYÔ TAME SYÔGAKKÔ



DAMINE SYÔGAKKÔ



KYÛKIYÔ SYÔGAKKÔ



KYÛ TOKUBETU KYÔJITU

あいちのたてももの まなびや編

AITI NO TATEMONO MANABIYA HEN



TÔKAI GA KUEN DAIKÔDÔ



KINJYÔBAKUJIN EIKÔKAN



TAKIGAKUEN HONKAN

REGISTERED TANGIBLE
CULTURAL PROPERTY

愛知登録有形文化財

愛知
登
文
会



KYÛ NANZANTYÛGAKU HONKAN



AITI NITYÛKÔDÔ



AITI DAIGAKU HONKAN



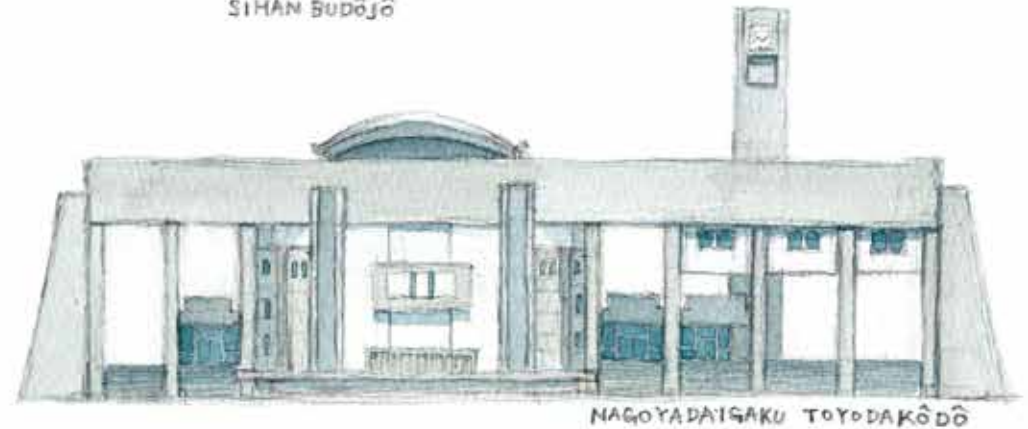
KYÛ AITITYÛGAKU HONKAN



SIHAN BUDÔJÔ

あいちのたてももの まなびや編

愛知県登録有形文化財建造物所有者の会



NAGOYADAIGAKU TOYODAKÔDÔ

はじめに

私たちのまわりには、
古めかしい洋館や、立派なお屋敷、歴史のある校舎に、荘厳なお寺、
可愛らしい教会堂や、大きなレンガの工場、
そして役割を終えた電波塔など、年月を重ねた建物が、
ごく自然にまちにとけ込んでいます。
そういった文化財として貴重な建物を国登録有形文化財といいます。
日本には他にも、重要文化財や国宝などに指定された建物があり、
現在その総数は、1万5000件に上ります。
市指定・県指定のものを含めると、さらにその数は増えますが、
一方で、フランスの規定する歴史的記念物の4万4000件には遠くおよびません。
日本は文化的には、まだ発展途上なのです。

本書は、愛知県にある国登録有形文化財の魅力を紹介する本です。

今回は「まなびや編」として、明治から昭和にかけて建てられた

学校建築を取り上げています。

それらはすべて、あたりまえに残ってきたわけではありません。

多くの人々の努力で残されてきたものも少なくないのです。

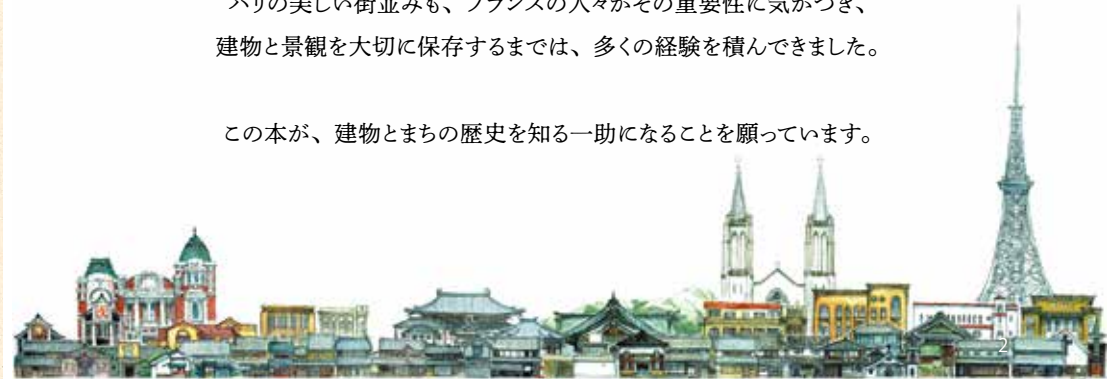
そういった意味では、残された建物はすべて価値のある良い建築といえます。

そんな身近にある良い建築を知ること、

私たちのまちとその風景を大切に思う気持ちにつながってほしいと思います。

パリの美しい街並みも、フランスの人々がその重要性に気がつき、
建物と景観を大切に保存するまでは、多くの経験を積んできました。

この本が、建物とまちの歴史を知る一助になることを願っています。



もくじ

はじめに	2
愛知の建物、学び舎編	4
【コラム】建物を楽しむために	10
◆小・中学校	11
田峯小学校（普通教室棟／特別教室棟）	12
『特集1』田峰観音と子ども歌舞伎	14
（豊橋市民俗資料収蔵室本棟（旧多米小学校本校舎）	16
豊田市藤岡民俗資料館（旧藤岡中学校特別教室棟）	18
刈谷市郷土資料館（旧亀城小学校本館）	20
【コラム】ワークショップのすゝめ	22
◆高校	23
東海学園大講堂	24
『特集2』東海中学・高校の記念祭とカヅラカタ歌劇団	26
金城学院高等学校栄光館	28
南山学園ライネルス館	30
旧愛知県第二尋常中学校講堂	32



滝学園本館および講堂と図書館	34
【コラム】瀧文庫と図書館	36
◆大学	37
名古屋大学豊田講堂	38
『特集3』名建築家の手掛けたキャンパス	40
愛知大学記念館（旧陸軍第15師団司令部）	42
旧愛知県岡崎師範学校武道場	44
愛知学院大学楠元学舎	46
【コラム】昭和塾堂	48
◆門柱	49
愛知県立旧制学校の門柱たち	50
【コラム】明治村の学校建築たち	52
飯田喜四郎先生特別インタビュー	54
「学校建築に思うこと」	54
あいちのたてもの博覧会	55
国登録有形文化財とは	56
愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会とは	56

愛知の建物、 学び舎編

はじめに

私たちの身近にある公共の建物といえば、学校を思い浮かべる人も多いと思います。子どもの頃に通った小学校はもとより、多感な時期を過ごした中学・高校、大学や専門学校で何かに打ち込んだ思い出など、時が経っても心に残る風景として、私たちに寄り添っています。

それら学校の多くが鉄筋コンクリートで建てられ、教室の向きや廊下の場所など良く似た建物が多いことをご存知でしょうか。そのような定型化した建物にたどり着くまでには、とても興味深い歴史的背景がありました。

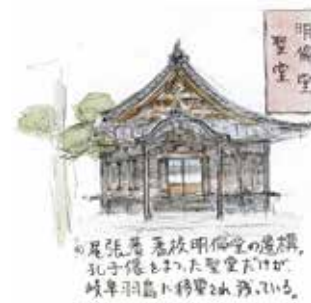
本書で紹介する国登録有形文化財の建物は、現在につながる学校建築の変遷を伝えています。明治から昭和にかけて建てられたそれらの建物は、単に昔の学校というだけでなく、かつては地域の人々にとってまちの自慢でもありました。

そんな学校の歴史を、少したどってみましょう。

江戸時代の学校

現在の学校のルーツは江戸時代の藩校や寺子屋などに求めることができます。

尾張藩では、初代藩主徳川義直が孔子を祀る聖堂と文庫を建て、学問所を設けたのが藩校の始まりといわれています。その後、藩士の子どもを教育する明倫堂が設立されました。明倫堂では儒教や国学のほか、さまざまな科目が学べたといえます。愛知県では他に豊



橋の時習館や豊田の崇化館、刈谷の文礼館などの藩校もありました。一方で、町民や農民の子どもが学んだ寺子屋は、読み書きそろばんとしつけを習う初歩的な教育が行われました。明治初期の小学校は、それら寺子屋を含む市井の郷校を転用して始められました。

今では江戸時代の学校建築はほとんど姿を消しましたが、明倫堂の聖堂は岐阜県羽島市の永照寺に移築され、本堂に転用されて現存しています。

明治維新後の愛知の学校

明治維新から5年、政府は国民すべての教育と国家の礎となる人材の養成をめざして「学制」を公布します。これは、全国に8つの大学と256の中学校、そして5万3760の小学校を設けるという大きな構想でした。ちょうどその頃、福沢諭吉の『学問のすゝめ』や、愛知県が発行した『学問のさとし』による教育の啓蒙もあり、各地に小学校が建設され始めました。

その中でも注目されるのが、長野県松本市の開智学校のような擬洋風建築の校舎です。大工棟梁たちが西洋建築をまねて創り上げたユーモラスな建物は、地域の人々にとって文明開化の象徴のように受け止められました。愛知県では名古屋市中南区に擬洋風の旧鳴尾学校が残されています。

壮大な構想を掲げた「学制」でしたが、実現には程遠く、明治12年の教育令の施行にあわせて廃止されました。教育令では各市町村の実情に合った小学校の開設が進められ、機能に即した校舎の建設が



推奨されました。この教育令の作成に携わったのが尾張藩出身で明倫堂に学んだ田中不二磨たなかふじもろでした。

片廊下型の完成

名古屋市東区代官町に生まれた田中不二磨は、佐幕派が優勢だった尾張藩の中で尊皇攘夷を唱え、維新後に明治政府で活躍した藩士です。明治4年に岩倉使節団に同行し欧米の教育制度を視察すると、帰国後は文部大輔ぶんぶだいすけとなり「学制」の実施に向け奔走します。また教育令の作成を進めるかたわら、校舎の配置計画や建築諸規則を広め、私立学校の開設に尽力するなど学校建設の礎を築きました。

田中が作成した教育令は、公布後も諸規則を頻繁に更新しつつ、それに伴い機能に準じた校舎の姿がたちづくられていきました。その到達点が、明治28年に文部省技師の久留正道くわいせいどうが著した「学校建築図説明および設計大要」(以下「大要」)です。これは学校の作り方を紹介した画期的な冊子でした。

例えば、校庭は南か東に配置し、教室は校庭に面して窓を大きくとり採光と換気に留意する。これは空気が入れ替えやすく、照明機器のない教室でも手元が影にならない工夫です。その他、教室の広さは四間(7・2メートル)×五間(9メートル)、天井高は九尺(2・7メートル)以上とし、廊下は片側に配し、虚飾を避け、衛生面に注意することなどが、図とともに細かく規定されました。また、実際に建設する際のお手本として、校舎の配置をコ字型やL字型などで示すモデルケースも紹介されています。



そして、明治26年に東海地方を襲った濃尾地震の経験から、平屋建てを原則とし、小屋組みにトラスを推奨しほうづえ方杖で補強することも盛り込まれました。

ここで示されたかたちが、現在の校舎まで続く片廊下型の基本的な形式となり、教室の広さも戦後もほぼそのまま踏襲され続ける基準となりました。本書で取り上げられている田峯小学校以下の校舎のほとんども、ここに準拠しています。

機能に特化し、いち早く定型化された学校建築は、明治の建物の中でも独自の発展を遂げました。「大要」が公布されたその年、東京駅の設計者辰野金吾たつのきんごの手掛けた日本銀行本店が完成していますが、荘重な西洋建築風の建物と比較すると、その違いがよく分かります。「大要」の公布を境に、木造平屋建ての片廊下型校舎は全国に普及していきました。

鉄筋コンクリートの校舎

大正12年、関東一円を襲ったマグニチュード7・9の大地震は首都圏に甚大な被害を与えました。

これをきっかけに脚光を浴びたのが、地震に強く火災に耐えられる鉄筋コンクリート造の建物でした。木造に比べると費用はかかりますが、2階建て以上に重層できるのも大きなメリットでした。

「学制」公布の頃には30%程度だった就学率も明治の終わりには90%を超え、日露戦争後には中学・高等学校への進学者も増えて、学校の数は増大していました。また明治初期に建てられた木造校舎の



筒井小学校

昭和11年

名古屋で唯一残る戦前の鉄筋コンクリートの小学校校舎。



老朽化も問題となり、敷地の確保が難しくなっていた都心部では鉄筋コンクリート造は理にかなった構造形式でした。

震災後の東京では小学校の鉄筋コンクリート造が原則化されましたが、一方で地方への普及は進みませんでした。その大きな要因が建設技術の問題でした。木造に比べて新しい工法だった鉄筋コンクリート造の知識や経験を持つ技術者は、まだ少なかつたのです。

営繕課技師たちの活躍

愛知では、鉄筋コンクリート造の普及に県や市の営繕課の技師が貢献しました。名古屋市では大正10年に園町尋常小学校が、県内では大正8年に新設された県立一宮中学校(現一宮高校)ら4校を皮切りに、鉄筋コンクリート造の校舎が建てられています。

それら校舎の多くが、壁面を鉄筋コンクリートで造り、屋根を支える小屋組みを木造にした混構造で、現在の校舎に至る過渡期の構造と見ることが出来ます。本書に登場する旧亀城小学校や滝学園本館も同じ構造です。いずれの場合も、立派な校舎を望んだ地域の思いと、鉄筋コンクリート造の技術と経験をもらった技師が結びついて、特色のある建物が建てられました。

ところで、大正から昭和にかけては教育施設が充実した時代でもありました。理科室や裁縫室、唱歌室などの特別教室が増えたのもこの頃です。時代は下りますが、旧藤岡中学特別教室もその系列の建物です。また、明治23年の教育勅語以降に発達した講堂も鉄筋コンクリートで建てられるようになり、東海学園大講堂のような名作



が誕生しています。

しかし、華やかな時代は長くは続かず、やがて戦争が社会に暗影を落とし始めます。日中戦争以降は、乏しい物資の中で鉄筋コンクリート造はもちろん、木造の校舎も厳しい制限を受けました。

戦時下で例外的に建てられた旧多米小学校の鉄が使用されていない建て付けから、当時の生々しいようすがうかがえます。

おわりに

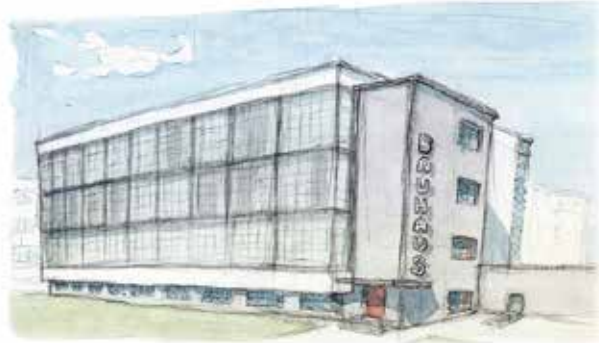
昭和20年、愛知の主要な都市は空襲で壊滅的な被害を受け、学校を含む多くの建物が焼失しました。その中には、爆撃を受けても倒壊を免れ、終戦直後から講義に使用された金城学院栄光館のような建物もありました。

やがて、戦災復興とともに鉄筋コンクリート造の学校が各地で建てられるようになり、明るく衛生的で頑丈な校舎が全国に行き渡りました。明治以来の壮大な構想は、ここでようやく実を結んだのです。

一方その裏では、古い学校はつきつきと姿を消していきました。僅かに残された校舎や講堂に足を踏み入れると、館内に漂う気配に言い知れない感動が込み上げてくることがあります。それは、建物にしみ込んだ懐かしい匂いが私たちの思い出とつながって、心に残る風景を鮮明に呼び覚ますからなのかもしれません。

バウハウス校舎
昭和元年
W・グロピウス設計

おそく世界イテ有名な校舎。昭和元年には、こんな先進的なガラスのカーテンウォールの校舎が登場していた。



建物を楽しむために

【建物を見るコツ】

古い建物は見るだけで楽しいものです。旅先や、あるいはいつもの街並みの中で良い建物を見つけた時は、まるで大切なからものを手に入れたような気分になります。

建物を楽しむ手段はひとそれぞれですが、あえてガイドラインを紹介するならば、まずは建物の周りの状況を眺めてみてください。なぜそこにその建物がたっているのかを、道路や街並みをヒントに探ってみましょう。

それから、建物をじっと見つめて、建物に漂っている雰囲気をじっくり感じてみましょう。もし上手くいかない時は、ディテール(細部)を目で追いかけてみてください。なんとなく感じていた雰囲気は、色味が理由かもしれませんし、細部に施された装飾が原因かもしれません。

雰囲気を味わえるようになったら、建物のたどってきた物語へ想像の翼を広げてみましょう。年代や様式、デザイン、構造の種類などの知識があれば、より鮮明に想像することができます。所有者やガイドボランティアから話を聞くことも役に立つでしょう。

建物を理解するうちに、その建物を大好きになっていけば、あなたはもう立派な建築マニアです。

【良い建築の3つの要素】

建築の世界では、良い建築は「用・強・美」の3つの要素を満たすものであるといわれています。「用」は機能的であること、「強」は構造的な強度、「美」は見た目の美しさをさします。

本書で紹介する学校の建物の多くは、「用」に重きをおいています。採光と換気に適した片廊下型や、基準寸法で定められた教室の大きさなどは、最たるポイントでしょう。「強」については、自然災害の教訓から鉄筋コンクリート造の頑丈な校舎を早くから採り入れてきました。

ただ「美」については、必ずしも追求されていたとはいえません。ですが、年月を経た建物は風雨にさらされることで風合いを帯び、「侘び寂び」に通じる美しさを感じさせ、学校の建物を良い建築へと仕上げています。

【建築マニアの嗜み】

建物はそれを使用し管理する所有者がいて、はじめて姿を保つことができます。見学する際には建物へのいたわりの心を持って、大切に扱いましょ。また、中には見学のできない建物もあります。そういった場合は無理をしないこと。じっくり機会を待てばいつか見ることができ、その日を信じて無茶をしないことも、建築マニアの嗜みなのです。

小・中学校

小学校は明治5年に公布された「学制」により、愛知県内に600校を設ける計画が立てられた。当時は尋常小学校といい、尋常とは普通を意味した。昭和16年から22年まで国民学校に変更された。



photo:nawoko kato

教室棟外観。青空と深い緑に囲まれて、赤い銅板瓦がひときわ目を惹く

田峯小学校(普通教室棟 / 特別教室棟)

伝統芸能を継承する、県内唯一の現役の古い木造校舎



北側廊下。竿縁天井が奥行きを与えている

徳川と武田の争いに巻き込まれ、騒乱の地となった田峯城跡や、城主の菅沼貞吉が1470年に勧請した田峰観音が今に残されています。

県内唯一の現役の古い木造校舎

田峯小学校は、田峰観音近くの山の中腹にあります。赤い銅板瓦と焦げ茶色の下見板、白い窓枠の木造校舎が水平に伸び、ひらかれた校庭から見渡せば、遠く続く峰々が広がっています。

田峯小学校は、明治6年に第15番小学田峯校として開校し、現在地へは昭和2年に移転、現校舎もその時に建てられました。以来90年



教室の風景。照明を消しても明るい

以上使用され続け、平成23年には瓦の葺き替えと耐震補強を施すなどの大規模な改修が行われました。

普通教室棟は、南側の校庭に面して教室を配置し、廊下を北側におく片廊下型です。また特別教室棟は、校庭をL字に囲うように配置されています。大きく開かれた窓は、採光と換気を目的としています。

長さ65mの普通教室棟の中心の玄関ポーチには「學」の字が入った鬼瓦がのり、懸魚にはピンク色のねじり梅模様があしらわれています。

また、北側を通る長い廊下では、雨天時に朝礼なども行われていたそうです。教室内は、採光と換気のため天井が高く、そのため室内は照明なしでも明るく、清潔な空気が循環しています。

児童数10名程度の小さな学校ですが、子どもたちが制作した習字や絵画がいたるところに飾られ、賑やかな雰囲気が漂っています。

青い目の人形と子ども歌舞伎

田峯小学校には、昭和2年にアメリカとの友好の証に交換された、グレースという青い目の人形が大切に保管されています。人形は、太平洋戦争の激化に伴い焼却命令が出され

奥三河と田峯地区

緑深い山間部には今も古くしきたりや習俗が残し、それまつわる祭祀が行われています。奥三河地方の山間部にある田峯小学校は、そんな祭祀と深く関わっている興味深い小学校です。

奥三河は恵那山や木曾山脈に連なる山々に囲まれ、田峯の里もそこにあります。標高400メートルほどの頂きには、戦国時代に

したが、ひっそりと隠されて戦禍を免れました。それが戦後に再発見されると、地域住民の尽力で故郷のオハイオ州デイトン市へ里帰りを果たしました。

田峯地区では、田峰観音に奉納する田楽や地歌舞伎が古くから伝わり、小学校に通う子どもたちは歌舞伎を奉納するため、年始になると厳しい練習に打ち込みます。それら課外学習は、地域住人と親たちの手厚いサポートで成し遂げられています。

地元の歴史や文化を尊び、その核となる小学校を大人たちが支える姿に、学校の本質を見る思いがします。



玄関ポーチの鬼瓦とねじり梅模様

1927年(昭和2年) / 2011年(平成23年)改修
木造平屋建て
【設計】不明
北設楽郡設楽町田峯字下畑9他



芝居小屋内部。谷高座は歌舞伎座保存会の名称

内には仮設の芝居小屋が建てられます。小屋には花道と棧敷が作られ、茅葺屋根の舞台と連結されます。天井は竹を縄で結わえてアーチ状に組み、それを丸太で架け渡された梁から吊り下げて作られています。その上をシートで覆って芝居小屋が完成します。小屋には200人以上が入場でき、寒風が吹くたびに風に煽られてたわむ屋根と底冷えのする場内は、独特の風情があります。

子ども歌舞伎を育てるもの

地歌舞伎のもうひとつの目玉が、子ども歌舞伎です。田峯小学校の子ども達が地元の人々の教えを受け、年明けから練習に打ち込んで舞台上に挑みます。

演目が始まる前には新入生のお披露目もあり、また演目によって上級生と下級生それぞれに見せ場が用意されているのも特徴です。限取の施された子どもたちが見得を切ると、客席からかけ声がかかり、温かい拍手とともにたくさんのおひねりが宙を舞うのも地歌舞伎の良さです。

それら伝統芸能は、村を支える文化として大切に継承される一方、地元の人々の根幹に



文化財に指定されている地歌舞伎舞台



photo: Akihiko Mizuno/Hitoshi Kumamoto

子ども歌舞伎のようす。掛け声とともにおひねりが宙を舞う

特集1

田峰観音と子ども歌舞伎

田峰観音と田峯・地歌舞伎

田峯地区では、毎年2月の第2週の週末に、五穀豊穡を祈る田峯と地歌舞伎を田峰観音に奉納する例祭が行われます。

田峰観音は、1470年田峯城築城の折に、城主菅沼定信が鎮護のために勧請したといわれています。また田峯田峯は、一年の農作業を模して楽や舞を行う伝統芸能で、約460年の歴史があり、国の重要無形民俗文化財に指定されています。一方地歌舞伎は、江戸時代に村を救った霊験を観音様に感謝し、370年以上奉納され続けてきた芝居です。

例祭の日にはたくさんのおひねりが立ち、境



芝居小屋の外観。奥の茅葺屋根が地歌舞伎舞台

は、子どもの成長をみんなで見守る姿が強く感じられます。そんな、昔ながらの日本のコミュニケーションが今も残されていることに、深い感動を覚えます。



田峯地区と
田峰観音では
漢字が違ふんです。
「だみね」とにころのと
同じく、なぜかは
分かってない
らしいです。

登録 / 2016年2月

登録基準 / 国土の歴史的景観に寄与しているもの



photo: Sayaka Ito/minachom/H. Kumamoto

教室内部。天井や床板、窓枠など木製のしつらえに包まれた優しい空間

豊橋市民俗資料収蔵室本棟 (旧多米小学校本校舎)

懐かしい教室風景の残る、旧木造校舎

懐かしの風景

木製の戸をガラリと開ければ、そこには多くの人が思い浮かべる懐かしい教室の風景が広がっています。

豊橋市内を走る路面電車の赤岩口停留場から東へ2キロ。かつて多米小学校だった木造校舎は、民俗資料収蔵室として使用されています。

片廊下型で標準的な大きさの校舎内には、古い農機具や養蚕の道具をはじめ、ミシヤ



外観。よく手入れされた裏庭

ポンポン時計、高度成長期の象徴だったブラウン管テレビなどが、ところ狭しと置かれています。

奥へ進むと、そのうちの一角は昔の教室の姿で復元されています。整然と並べられた机や椅子には肥後守で削られた子どもたちの名前が残り、まるでタイムスリップしたような錯覚を覚えます。

戦時下で建てられた小学校

多米小学校の本校舎は、戦時下の昭和19年に建て替えられた珍しい校舎です。明治維新以降、昭和初期まで増え続けた学校建築は、昭和12年の日中戦争を境に建設を自粛、新設は原則禁止とされました。



昭和の風情を復元した展示室

そのような状況下で建設を可能にしたのは、ひとえに地元の人々の努力によります。建設費用や資材を自分たちで負担し、木材は裏の山から切り出してきたといいます。また、鉄が使用できなかったため、欄間のレールには竹を用い、戸車は陶器で製造しました。

その一方で、床板や天井の合板、小屋組みのトラス、それを支える柱と方杖、さらに窓枠に至るまで、ガラスを除くほぼすべてが木で作られ、館内は優しい雰囲気になっています。今となっては、塗装すらされなかったことも幸運でした。

一見すると、当時の木造校舎の規定に則ったありふれた学校建築でも、建設の背景や細部をつぶさに見ることで、独自の魅力を発見することができます。

このもうひとつの見どころは、机と椅子です。シンプルな継ぎ手で組み立てられ、椅子は曲線のついた座面を木製の釘で固定してあります。年月を経て丸みを帯びた姿は、民芸品のような美しさを湛えています。

小学校から民俗資料室へ

多米小学校本校舎は、開発の進んだ多米地区に新しい校舎が完成した昭和51年に役割を

終えました。そして2年後に、豊橋市美術博物館の民俗資料収蔵室及び収蔵庫として再利用されることが決まりました。

現在は土日のみ開館し、季節に応じて餅つきなどのイベントも行われています。それを開催するスタッフの多くが、旧多米小学校の卒業生たちです。

かつて新校舎を建てた人々の子どもたちは、思い出深い校舎の新しい活用方法を今も模索し続けています。



机と椅子。民芸品のように美しい

1944年(昭和19年)

木造平屋建て

[設計]不明

豊橋市多米町字滝ノ谷34-1-1

https://www.toyohashi-bihaku.jp/?page_id=224

※土日のみ開館



出窓の構成。教室内により多くの光と空気を採り込む工夫

photo:nawoko kato

豊田市藤岡民俗資料館 (旧藤岡中学校特別教室棟)

木造カーテンウォールの、旧特別教室棟



外観。玄関ポーチは後年の増築部

出窓と採光

のどかな街並みを走る県道を脇道に入ると、丘の上に文化施設の集まる藤岡コミュニティ広場があります。その片隅に赤い瓦屋根に下見板張りの藤岡民俗資料館がたっています。この建物は以前、裁縫室や理科室、調理室を備えた藤岡中学校の特別教室棟でした。傍らに残る古い門柱はその名残です。

外観をよく見てみると、大きく開けられた窓が出窓になっていることに気がつきます。採光と換気のために作り付けられたもので、建物から45センチ張り出し、高さは2・1メートル、大きい方は幅7・2メートルもあります。また、出窓間に設けられた非常口上部の軒裏には木製の換気窓が開けられています。出窓は教室棟の構造から離れていて、これは近代建築で発達したカーテンウォールと同じ考え方と見ることが出来ます。乳白色のガラス窓から採り込まれた光は教室内で拡散し、柔らかな光を室全体に届けています。

特別教室の歴史

特別教室は、学校に求められた時代性が



廊下側も窓が多く明るい

現れています。裁縫室は女子の就学率を上げる目的で設けられ、また理科室は、第一次世界大戦後に科学力の向上を目的として施設が進んだといわれています。そのほか、唱歌室も軍歌の普及にあわせて設置された特別教室です。その一方で、畳敷きが多かった裁縫室は、地域の人々の集いなどにも用いられました。また理科室は、理科準備室と暗室がセットで設けられましたが、暗室はほとんど使用されず、科学系のクラブの部屋になる場合も多かったといえます。

西三河の民俗資料

藤岡民俗資料館は展示品も見どころのひとつです。窯業や養蚕の古道具や、街の歴史を紹介するパネルが隙間なく展示されています。

中でも興味深いのが、旧準備室の献馬用の標具と棒の手の展示です。藤岡は古くから、豊作に感謝し豪華に飾られた献馬と、剣術や棒術を元にした伝統芸能の棒の手の演技を猿投神社に奉納してきました。それら尾張から伝わった古い習わしの資料を目的に、遠方からも来館者が訪れています。

藤岡民俗資料館は、平成8年の改修工事の折に白いモルタル塗りの外観に変更されましたが、同26年には元の下見板張りに戻され、傷んだ木製の窓枠もそのまま修理されました。

西三河の貴重な民俗資料を展示する資料館としては、古見がかつた現在の姿こそが、さわしい佇まいだと思います。



養蚕の道具の展示

1954年(昭和29年) / 1981年(昭和56年)増築
2014年(平成26年)改修
木造平屋建て
【設計】不明
豊田市藤岡飯野町井ノ脇40-1
<https://www.city.toyota.aichi.jp/shisetsu/bunka/shiryoushonokai/1006108.html>
※見学可。月曜日・年末年始は休館。



直線的な装飾の付く、賑やかな外観。「キ」の柱型が面白い

刈谷市郷土資料館(旧亀城小学校本館)

まちな名建築家が建てた、コンクリートの小学校校舎



玄関ポーチからの眺め

鉄筋コンクリートの校舎

旧亀城小学校本館は、大正から昭和初期にかけて刈谷で活躍した建築家大中肇の代表作です。当時としては珍しい、鉄筋コンクリートで建てられた校舎です。

鉄筋コンクリート造は大正12年の関東大震災をきっかけに脚光を浴び、東京では原則化されましたが、地方では普及が遅れていました。

建築家大中肇と刈谷

愛知県営繕課に勤めていた大中は、刈谷町立高等女学校の校舎を担当した後に職を辞し、同地で設計事務所を構えました。大正13年のことでした。その頃の刈谷は、豊田紡織の大規模な工場誘致に成功して活気づいていました。

大中は営繕課時代で得た知識と経験を生かし、刈谷を中心に西三河地方で多くの建物を設計しました。中でも鉄筋コンクリート造の建物を多く手掛けた業績は大きく、今も上天温泉などが現存しています。

亀城小学校

亀城小学校は、旧刈谷城の堀が入り込んだ複雑な敷地にあり、新校舎には規模が大きいても重層できる鉄筋コンクリート造が選ばれ



昭和コレクションの展示室

ました。その決定には、工場誘致でも陣頭指揮をとった大野一造町長が関わったといわれています。

大中は鉄筋コンクリートの壁面を二色で塗り分け、ユニークな線形で飾って、楽しい外観をつくり上げました。正面の玄関ポーチにはペディメントと柱型を崩したような装飾が付き、ゆるいアーチが出迎えてくれます。また左右対称の本館は両隅の翼部を大きく張り出しているため、迫力のある構成になっています。2階の「キ」の柱型と大きな窓のリズミカルな配置が庭の植栽と合わさって、異国情緒の漂う明るい表情をつくっています。

おもちゃ展示とワークショップ

一時は取り壊しが検討された亀城小学校本館ですが、地元の人々の尽力で昭和55年に刈谷市郷土資料館として生まれ変わりました。近年リニューアルされた展示室では、刈谷城の模型をはじめ、刈谷の教育に関する資料が展示されています。

とりわけ人気なのが、昭和のコレクションのおもちゃの展示です。展示棚には懐かしいメンコやソフトビニールの怪獣などが展示され、これを目当てに来館する人も多いといえます。



展示されたおもちゃたち

1928年(昭和3年) / 2011年(平成23年)耐震改修
鉄筋コンクリート造2階建て(小屋組みなど木造)

設計 大中肇
刈谷市城町1丁目25番地1

https://www.city.kariya.aig.jp/shisetsu/
bunkashiminokuryu/kyodoshiryokan/
※見学可。月曜 祝日 年末年始は休館。

高校

愛知県の高校（旧制中学校）は、藩校明倫堂に起源をもつ愛知県中学校にはじまる。小学校に比べると設置が遅れ、明治29年の第二尋常中学校、同32年の私立学校令以降に開校が進んだ。



column

ワークショップの すゝめ

【なごや折り紙建築と愛知商業高校ユネスコクラブ】

名古屋市東区の文化のみち榎木館では、毎年4月に名物企画の「なごや折り紙建築展」を開催しています。手のひらサイズでポップアップ式に立体化する折り紙建築は、名古屋市在住の建築家箕清澄氏が愛知の建物を中心に制作しています。

その展示期間中の目玉が、こどもの日の折り紙建築ワークショップです。赤レンガの工場や中川運河沿いの倉庫、名古屋テレビ塔などの折り紙建築を制作することで、地元の建物や街並みに興味を持ってもらいたいという気持ちが込められています。

このワークショップには、もうひとつ特徴があります。それは、同じく東区の愛知商業高校ユネスコクラブの高校生たちがボランティアで参加していることです。子どもたちにとって高校生のお姉さんが手伝ってくれるワークショップは、楽しくて特別な時間になります。

このような地域の小学校と高校同士がつながるワークショップは、単にイベントとして盛り上がるだけでなく、その学区がひとつの輪になる良いきっかけになります。そして何より、楽しい雰囲気に満ちたワークショップの風景は、開催側の大人たちを幸せな気持ちにしてくれるのです。





端正なファサード。エッジの効いたフォルムと黄色いタイルが青空によく映える

photo: nawoko kato

東海学園大講堂

卒業生たちが手掛け、カヅラカタ歌劇団を生んだ名建築



入り口床のモザイクタイル

名古屋で一番かっこいい講堂

東海学園大講堂は、端正なファサードが特徴的な建物です。ファサードとは建物の正面をいいますが、語源はフェイス（顔）と同じラテン語の *facere* に由来します。

鉄骨鉄筋コンクリート造のおおらかなスケールと、均整の取れた構成。石面タイルの色合いに、表現主義的な装飾。弓状に張り出した庇とバルコニーはファサードに奥行きを与え、2階と3階をつなぐ白い柱型は、講堂のあるメインフロアを示しています。また、アーチの入り口に施された意匠は、仏教建築の門を感じさせます。

これら巧みなデザインを手掛けたのは、同校卒業生の愛知県営繕課の技師たちでした。

愛知県営繕課の名トリオ

東海学園は、明治22年に創立された浄土宗の僧侶養成学校に始まります。その後、一般の男子生徒を受け入れて名称も東海中学校へ変更し、現在に至ります。

昭和3年、全校生徒で祭祀や儀式を行うことができない講堂が求められると、昭和天皇の即位を記念する事業として寄付を募り、実現にこぎつけました。



独特の雰囲気漂う講堂

設計を任された愛知県営繕課の酒井勝と大脇勲、宮川只一は、この直前に昭和塾堂を手掛けたいづれも腕に覚えのある技師たちでした。大講堂のファサードからは、彼らが伸び伸びとデザインを楽しんだ雰囲気が見出されています。

おおらかなスケール

講堂は、幅18・4メートル、奥行き38・4メートルの大空間です。ノコギリ状に折り返された天井は音響に配慮した造形で、梁の側面や下端に漆喰装飾をあしらひ、2階席に建つ4本の柱も空間のアクセントになっています。

以前は、壁面上部や舞台脇の高所に明かり採りの窓があり、客席側の入り口付近にも円形の窓がありましたが、現在は塞がれています。

また、講堂内におかれた木製のベンチは、日本初のヴァイオリンメーカー鈴木ヴァイオリンが納品したかたちを受け継いでいます。

儀式から文化祭まで

戦災を免れた東海学園大講堂は、1階を体育館から食堂に変更するなど手は加えら

れていますが、良い状態で残され、今もさまざまなイベントで使用されています。

卒業授戒会では、暗闇の講堂でスポットの当てられた阿弥陀仏が浮かび、校長の持つ一本のろうそくを頼りに祈りを捧げる神聖な儀式が執り行われます。

一方では、全国的にも有名なカヅラカタ歌劇団もこの講堂で上演されています。講堂は歌劇にあわせて演奏されるオーケストラ席や、本格的な照明計画などの大掛かりな舞台設備にも柔軟に対応しています。

建設から90年近く経った今も東海学園の文化の中心で活躍し続ける、愛知で屈指の名建築です。



弓状の庇を見上げる

1931年（昭和6年）

「設計」愛知県営繕課（酒井勝、大脇勲、宮川只一）
鉄骨鉄筋コンクリート造3階建て

名古屋市中区筒井1-2-35

※非公開



photo: Ryota Murase

カヅラカタ歌劇団のようす。舞台下はオーケストラ席。凝った照明や衣装が舞台を彩る

東海中学・高校の 記念祭とカヅラカタ歌劇団

特集 2

いざ、文化祭潜入！



記念祭のようす。制作物は生徒のお手製

学生時代の花形イベントのひとつが文化祭です。東海中学・高校の厚意で、創立記念祭とカヅラカタ歌劇団を取材させていただきました。

毎年9月の終わりに開催される創立記念祭は、昭和23年にはじまった伝統のある文化祭で、毎年1万人以上が詰めかけています。

人気の秘密は生徒たちが制作する力の入った出し物です。東海中学・高校では、受験を控える高校3年生以外のほぼすべての

クラスが出し物を制作しています。

教室を覆う大掛かりな建て付けはベニヤとダンボールで制作され、ドラえもんのパロディから脱出ゲームなど定番の出し物まで多種に渡り、人気の高い出し物にはずらりと行列が並びます。

夏の、カヅラカタ歌劇団

そんな記念祭から誕生したのがカヅラカタ



展示されたカヅラカタ歌劇団の衣装



販売されているパンフレット

歌劇団です。名称の示すとおり宝塚歌劇団を逆にした構成で、女役まですべてを男の子が演じています。平成15年の初公演以降大人気の企画となり、たくさんの来館者が詰めかけるため、近年では記念祭から独立して開催されるようになりました。

企画立案は記念祭実行委員の生徒たちで、それを顧問の久田光政先生や卒業生、保護者会などのサポートで開催にこぎつけたといえます。現在、その環は同校の枠を超え、音響や照明、衣装製作やポスターデザインなどを、名古屋の専門学校らが協力して舞台を整えています。

久田先生によると、カヅラカタ歌劇団の成功は大講堂の存在も大きかったといいます。移動できる長椅子などの舞台設営的な利点

と、なにより空間の持つ素晴らしい雰囲気、演劇を後押ししているのです。

秋晴れの下、今年の公演も大盛況のうちに幕を閉じました。



カヅラカタ歌劇団は、パンフレットやDVDを販売して、東日本大震災の復興活動を支援しています。舞台とあわせて本当に素敵な活動ですね。



photo:nawoko kato

白を基調に整えられた美しい講堂。戦後すぐにヘレン・ケラーも訪れた

金城学院高等学校榮光館

名古屋の文教地区に咲く、白亜の講堂



鐘楼や塔屋の造形が楽しい外観

白亜の講堂

名古屋城東の白壁界限は、名古屋市の文教地区として早くから学校が開校されてきました。

そのひとつ、金城学院高等学校は、プロテスタント系の女子ミッションスクールとして誕生しました。敷地の中心には、生徒たちが礼拝を行う榮光館があります。

白い壁面に赤い洋瓦が載るスパニッシュ様式の建物は明るくて清潔感があり、鐘楼や塔屋がアクセントとなって、どこか可愛らしいデザインとなっています。

置するなど、辛い対応も迫られました。また戦禍を免れるために、壁面はタールで黒く塗られました。

昭和20年3月の空襲で爆裂弾が命中し、大階段と講堂は大きな被害を受けます。しかし、その翌日には生徒たちが集まり、榮光館を清掃したといえます。そして終戦を迎えると、無事だった場所を仕切って教室に利用し、タールで塗られた壁はみんな白く塗り直されました。

どんな苦難にまみれてもきれいな姿を保ち続ける榮光館に、女性のしなやかさと美しさを見る思いがします。



中木にあしらわれたタイル

側廊や高窓から注ぐ光でとても明るいですが、平成5年には立派なパイプオルガンが設置されました。

みんなで選んだデザイン

榮光館は、アメリカ本国の南長老教会や保護者、卒業生、教職員、在校生など多くの人々の寄付で建てられました。キリスト教では、寄付は礼拝と同様に神への奉仕を意味します。

設計は、武田五一の薫陶を受けた城戸武男が中心となり、建築衛生学に造詣の深い佐藤鑑が加わって、ゴシック様式、スパニッシュ様式、モダン様式の計画案を制作しました。その中からスパニッシュ様式を選んだのは、当時の生徒と教員たちでした。

建設当初の講堂には、冬の礼拝でも寒くないように床暖房が整備され、また大階段には琥珀ガラスがはめられていたといえます。

清らかな意匠

講堂が完成した翌年、日中戦争の火蓋が切られると、日本は暗い戦争の時代に突入しました。ミッション系の学校は偏見の目を向けられ、礼拝を存続させるためには奉安殿を設



3階の礼拝堂

館内に入ると、教会堂のような廊下の中央に、講堂へ上る大階段があります。夕暮れ時になると、西向きに開いた縦長の窓から、青や赤、オレンジや黄色の光が差し込み、その美しさに思わず目を奪われます。また、講堂前の中木にきれいなタイルがあしらわれているのも見どころです。

1070人を収容できる講堂は、白を基調に腰壁や梁を木調でまとめ、外に張り出した

1936年(昭和11年)

鉄筋コンクリート造3階建て

【設計】佐藤鑑(基本設計)、城戸武男(実施設計)

名古屋市中区白壁4-64

※非公開



photo: nawoko kato

外観。以前はこのデザインに做った校舎がつながり、街並みを形成していた

南山学園ライネルス館

南山町の街並みを形成する、学園始まりの校舎



修道院のような廊下

南山学園始まりの校舎

ライネルス館(旧南山中学校校舎)は、南山学園で最初に建てられた記念碑的な建物です。学園の創立者であるヨゼフ・ライネルス神父は、大正14年から土地区画整理が進められていた八事の丘陵地に教育の場を求め、用地の払い下げに成功しました。

南山の名前は、地名の南山(みなみやま)町を『詩経』に登場する南山(なんざん)と読むことで、堅固・長寿を意味する言葉にあやかってつけられました。

現在は創立者の名を冠した記念館として、学園のアーカイブセンターに使用されています。

ドイツ人建築家マックス・ヒンデル

ライネルスは校舎の設計を、親交のあったドイツ人建築家のマックス・ヒンデルに依頼しました。ヒンデルは、大正13年に来日して以降、札幌や横浜を拠点に多くの建物を設計した建築家で、中部圏にもカトリック新潟教会や多治見神言修道院などの作品を手掛けています。

校舎は、ゆるくカーブする道路に沿って南向きに教室を配し、北側に廊下を置く片廊下型です。



3階の企画展示室

道路に面した外観は、明るくすっきりとした表情を見せ、以前は同じデザインで左右に増築され、街並みを形成していました。詳細に見ていくと、壁面は黄土色の人造石洗い出し仕上げで大きな窓を配し、正面中央の玄関には4本の円柱が置かれています。また、ポーター状の柱型と屋上の三角の切れ込みのある手すり壁が、全体のデザインを巧みに統合しています。

館内に足を踏み入れると、漆喰と木調の二色で構成されたしつらえが、修道院のような雰囲気や漂わせています。入り口正面の幅の広い階段は屋上まで続き、踊り場には当時の学校には珍しかった水洗トイレがありました。この階段は以前、木製の美しい家具のように仕上げられていて、今も最上階にその姿を見ることが出来ます。

もうひとつのファサード

この建物にはもうひとつの隠れた見どころがあります。それは、グラウンドに面した反対側のファサードです。

丘を削平して整地したグラウンドは正面側より低く、建物の見え掛かりは地階を入れ4階建てになります。大胆に張り出した階段室

の最上部の壁面には、三角形と菱形の窓がうがたれて、賑やかな表情をつくっています。学生たちはこちら側をメインに入入りし、卒業アルバムの撮影スポットとしても人気があったそうです。

ヒンデルが建築を学んだ頃のドイツでは、ドイツ工作連盟や表現主義、新即物主義などが登場した近代建築の揺籃期にあたります。それらを横目に、実直に設計に向き合ったヒンデルの人柄と技量が、建物の控えめな美しさに滲み出ています。



グラウンド側のファサード

1932年(昭和7年)
鉄筋コンクリート造3階建て
「設計」マックス・ヒンデル
名古屋市昭和区五軒家町6
<https://www.nanzan.ac.jp/archives/>
※開館時間平日午前10時〜午後4時(開覧室 展示室)



photo: Hisao Takeuchi

講堂内部。おおどかな空間に柔らかな光が染み渡り、なんとも美しい

旧愛知県第二尋常中学校講堂

新興住宅地に佇む、旧中学校講堂



外観。ベンキ塗りの配色が可愛い

おしゃれな住宅地のミステリースポット
岡崎駅から南へ200メートルほどの場所に、三菱地所が手掛ける新興住宅地「岡崎ブライムパーク春咲の丘」があります。その一面のきれいに整備された公園に、ピンクとクリーム色の不思議な建物がたっています。建物は、大正から平成にかけてこのあたり

ベントのある日以外は公開されていません。幾度の変遷を経た建物は、かつて女生生たちが演劇や式典に使用していたような賑やかな日々が戻ってくるのを、じっと待っています。

一帯で操業していた日清紡績針崎工場のもので、工場内にあった龍城実科高等女学校の講堂として使用されていました。話はここで終わりません。この建物はさらにその前の明治中頃に、愛知県第二尋常中学校（現岡崎高校）の講堂として建設され、同校の移転にともない日清紡績に買われて、ここに移築されました。

新しい住宅地に明治の建物が佇む不思議な風景には、そんな歴史があるのです。

木造の大空間

講堂に足を踏み入れると、木造とは思えない広い空間に圧倒されます。幅16メートル、奥行き19・7メートルの室内には、広い梁間を補って白い柱が立てられています。その柱を境に内側と外側のような区分が感じられます。柱の下部をよく見るとホゾがあることから、内側には畳が敷かれていたのかもしれない。正面の舞台奥には、御真影



窓まわりの詳細

と教育勅語を祀る奉安室もありました。一方、外観は大きな寄棟屋根に瓦が載り、車寄せの上に鬼瓦が付いた和風の意匠と、ドイツ下見板を縦、横の框で押さえた洋風のデザインが混在しています。下見板をクリム色に、框などをピンク色に塗った姿が、古さとともに可愛らしさも感じさせます。

岡崎市内には、このような和洋折衷の建物に重要文化財の旧額田郡公会堂があります。建設年はこちらの建物のほうが10年ほど下ります。

再び講堂内を見てみましょう。大きな寄棟屋根は軒の出が浅く、三方に開けられた窓の採光を遮りません。そのおかげで、室内は想像以上に明るく感じられます。また高さ3・7メートルの格天井は、全体の大きさからすると低く感じられますが、かえってそれが奥行きのある印象を生み、迫力のある空間に仕立てています。

小屋組みはクイーンポストトラスとなっていて、深い天井裏では豪壮な構造体が並び、大きな屋根を支えています。

また会う日まで

残念ながら、この興味深い建物は特別なイ



舞台を見る。左手が奉安室

1897年（明治30年）／1925年（大正14年）移築
木造平屋建て
【設計】愛知県営繕課
岡崎市針崎町字春咲1-1
※現在は岡崎市の所有（非公開）



夕日のあたる本館と時計塔。校訓の質実剛健を感じさせるデザイン

滝学園本館および講堂と図書館

尾張藩の豪商が開いた、旧実業学校の校舎群

滝文庫から実業学校へ

滝学園本館を訪れて驚くのが、古さをほとんど感じさせないことです。鉄筋コンクリート造で装飾の少ないシンプルな構成であるため、現在の校舎と比べても遜色が無いのです。なにも説明されなければ、とてもこの建物が90年以上前に建てられたとは気づかないでしょう。

わずかに、屋根から覗く時計塔が、歴史のある校舎の風情を醸し出しています。



2階たまり。踊り場のスチールサッシュの窓に注目

滝学園は、実業家の瀧信四郎が旧宅跡に瀧文庫を開設したことに始まります。尾張藩の豪商だった瀧家は、維新後も繊維商などの事業で成功を収めました。

地元の興隆を願って設立した瀧文庫は、やがて瀧実業学校の開校につながります。田畑に囲まれた実業学校では、先進的な農業実験も行われていたといえます。

質実剛健の意匠

門を入るとまず目を惹くのは、本館の屋根から突き出たトンガリ屋根の時計塔です。全体から見ると小ぶりですが、可愛らしいアクセントになっています。

一方の本館は、灰色と白のモルタルで塗られ



古い建て付け

たシンプルなデザインです。1階と2階を貫く柱が均等に並び、両側の張り出した翼部とペディメントを掲げた正面玄関でまとめられています。

館内に入ると、入り口正面と翼部の角に階段があり、踊り場の上方には対になったスチールサッシュの大きな窓が開けられています。線の細い突き出し窓とおおらかな階段、それらをつなぐたまりのスペースが、明るいきれいな場をつくりだしています。またずっと向こうまで見通せる廊下も見どころのひとつです。

本館は、壁面と2階床、廊下側の梁のみ鉄筋コンクリート造で、小屋組みは木造トラスを架けています。館内にはいたるところに古い建て付けが残り、飾らないディテールが美しいです。

講堂と図書館

本館の手前には、柱型が回る白い講堂があります。控えめなペディメントが載る、どこかギリシア神殿を感じさせるデザインです。

この建物も本館と同じく壁面を鉄筋コンクリート造とし、小屋組みは鉄骨トラスを架けています。見どころは玄関ホールのタイルで、装飾の少ない構内で異彩を放っています。

また演壇の奥には奉安庫が残り、時代の名残をとどめています。

滝学園には他に、瀧文庫を受け継いだ立派な図書館があります。昭和40年に2階部分が増築されました。設計を担当したのは愛知県営繕課で腕をふるった黒川巳喜みきです。館内を無柱空間にするため構造に工夫を凝らした興味深い建物です。

創立時の田園風景は今や住宅地に変わり、実業学校は県内有数の進学校となりました。しかし、その背後に流れる創立の思いは校舎の姿で残り、現在も受け継がれています。



講堂の外観

本館 / 1926年(大正15年)
講堂 / 1933年(昭和8年)
図書館 / 1933年(昭和8年)
1965年(昭和40年)増築
[設計] 本館 / 村瀬國之助
本館 / 鉄筋コンクリート造2階塔屋付き(一部木造)
講堂 / 鉄筋コンクリート造2階建て(一部鉄骨造)
図書館 / 鉄筋コンクリート造2階建て
江南市東野町米野1番地
※非公開



大学

名古屋帝国大学の創設は昭和14年。

旧帝国大学で一番遅く、愛知県の寄付で開校にこぎつけた。

また戦後すぐに開校した愛知大学も旧制大学となる。

photo:Hitoshi Kumamoto

column

瀧文庫と 図書館



【滝学園発祥の地】

瀧文庫は、滝学園正門脇の細い道を西に500メートルほど進んだ先の、木々に覆われた敷地の中央にたっています。もともとここには瀧信四郎の生家があり、その一部は通りに構えた長屋門の奥に残されています。

外装には水色の下見板が張られ洋風の佇まいを見せながら、中央の玄関ポーチには唐破風の屋根が載る和洋折衷のデザインです。向かって左側に図書室が、右側には講堂があります。館内には木製の凝った建て付けが残り、特に天井の仕上げは今もきれいな姿を見せています。文庫内の図書室には2万冊以上の蔵書があったといい、読書と講話を何より重んじた信四郎の思いが、この建物には詰まっています。

昭和8年に、瀧実業学校の校内に図書館が建てられると、蔵書もそちらに移されました。当初は平屋でしたが、昭和40年の増築の際に2階部分を大きく張り出す今の姿になりました。館内は柱のない広い空間で、小さな町の図書館くらいの規模があり、司書もふたり常駐しています。増築部を設計した黒川^{みき}巳喜は、愛知県営繕課時代に愛知県庁舎の実施設計を担当した実力者で、建築家黒川^{あしろう}紀章の実父としても知られています。



photo:nawoko kato



photo: Hitoshi Kumamoto

正面の外観。メガストラクチャーのスケール感と繊細な造形の構成が美しい

名古屋大学豊田講堂

現代建築の巨匠が二度手掛けた、奇跡の講堂



講堂内部。天井のシェルに注目

学校の顔

東大の安田講堂、早稲田大の大隈講堂、そして名大の豊田講堂。大学に顔となる建物があるのは幸せなことです。それは、地域社会の誇りとして、多くの人々に記憶され続けるからです。

本山から八事へ抜ける山手グリーンロードを進むと、バスロータリーや地下鉄の駅が集

まる開かれた場所に出ます。東の丘には豊田講堂が、西には大学のキャンパスが、道を跨いで軸のようにつながっています。この軸の先には名古屋城が位置しています。

この軸の構想、アーバンデザインの基点として豊田講堂を見たとき、建物に込められた意図が見えてきます。

建築からアーバンデザインへ

名古屋大学は戦後に旧名古屋帝国大学などを統合して設立されました。官民が協力してキャンパスを整備する中、講堂はトヨタ自動車工業株式会社の寄付で、創始者豊田佐吉の偉業にあやかかって「豊田講堂」と名付けられました。

設計は若干30歳の建築家槇文彦。当時の日本建築界では丹下健三を中心に優秀な建築家が登場し、世界中から注目を集めていました。槇はアメリカでアーバンデザインを学んだ経験と、同世代が旗揚げした建築運動メタボリズムを横目



ヒロティからキャンパスを見る

に、講堂のデザインに取り組みました。

まず目を惹くのが、80メートルの巨大なコンクリートの梁です。それを細い柱とコ形の壁で持ち上げています。梁の下の白い壁面が講堂で、脇の通り抜けのヒロティの先には森が見えます。槇は建物のコンセプトを、キャンパスと森をつなぐ門と考えました。また時計塔や講堂は、威圧感を消すようにシンメトリーを崩して配置されています。

講堂内に足を踏み入れると、上空にはシェルが浮かび、大きな照明器具が吊られています。これらダイナミックな造形を支えているのが、巨大な梁やコ形の壁などの構造体です。

槇は、巨大な構造体が創り出す象徴的な建物が大学の軸の要になり、都市の景観へとつながっていくようなスケールの大きいデザインを構想しました。

巨匠の帰還

平成20年、豊田講堂は老朽化に伴い大規模な改修が行われました。世界的建築家となった槇はその改修設計にあたり、通り抜けだった空間の一部をガラスで囲って、気持ちの良いアトリウムに生まれ変わらせました。



かつては外部だった2階アトリウム

また傷んだコンクリートの表面を削り、打ち放し仕上げを再現した外壁改修工事も行われました。同じ設計者が登録有形文化財の改修を手掛けた極めて稀な建築です。

大学の顔をつくった若い建築家が50年後に老練な巨匠となって再び建物を蘇らせる。そんな物語が愛知の最高学府で体現されたことは、地域社会にとって本当に幸せなことだと思います。

1960年昭和35年 / 2008年平成20年 改修
鉄筋コンクリート造3階建て地下1階 / 鉄骨造
[設計] 槇文彦
名古屋市中村区千種区仁座町1
http://www.nagoya-u.ac.jp/about-nu/public-relations/
videoarchive/toyodakoudeco/toyoda.html



南山大学のキャンパス。コンクリート打ち放しと赤土色のデザインで統一された校舎が美しい

photo: nawoko kato

特集3 名建築家の手掛けたキャンパス



改装された校舎。壁画はレーモンドのデザイン

アントニン・レーモンドの南山大学

愛知には名古屋大学のほかにも、名建築家が設計したキャンパスがあります。チェコ出身の建築家アントニン・レーモンドの南山大学と、その弟子吉村順三の愛知県立芸術大学です。

南山大学は名古屋大学から歩いて10分ほどの丘陵地にあります。レーモンドは土地の造成を極力おさえ、丘陵の馬の背を軸として校舎を配置しました。レーモンドは鉄筋コンクリート造の第一人者で、ここでも得意のコンクリート打ち放しを用い、赤土色のデザインで校舎を統一しています。南面には日差しを和らげるルーバーを取り付け、建物の表情に変化

をつけています。

建設から50年以上が経ち、老朽化の進んだ校舎は近年レーモンドのデザインを継承しつつ改修され、おしゃれでフレッシュなキャンパスに蘇りました。古色を帯びた校舎に新しい彩りが加わり、学内はとも賑わっています。

吉村順三の愛知県立芸術大学

一方の愛知県立芸術大学は、長久手の丘陵



photo: Ryota Murase

愛知県立芸術大学のゆとりをもって配置されたキャンパス

地にキャンパスを構えています。

構想段階からキャンパス計画を任された吉村は、建物と建物の間隔をたっぷり取り、高さを押さえた校舎をゆとりをもって配置しました。また全体的に小さめな寸法で設計され、校舎はどれもコンパクトで身体にフィットするように考慮されています。

一番の見どころは、トップライトが学科ごとに違い創作に適した採光が追求されていること。館内を散策していると、思わぬところに光が落ちる美しいシーンに出会えます。

吉村もレーモンドと同じく、土地造成を最低限に留めて、植栽に力を注ぎました。完成から50年以上が経ってキャンパスは緑に覆われ、学生たちは穏やかな空気の流れる構内で日々創作活動に打ち込んでいます。



光が落ちる美しいシーン



吉村さんはレーモンドさんのお弟子さん。ちなみに愛知県立芸術大学からは、現代アートの奈良美智さんや杉戸洋さんが単立っています。





緑に囲まれた記念館。白いドイツ下見板の外観が目目を惹く

愛知大学記念館(旧陸軍第15師団司令部)

貴重な資料の眠る、旧陸軍庁舎の大学施設



photo:nawoko kato

広い階段ホール。タペストリーは平松礼二作

陸軍第15師団司令部

建てられた経緯や抱えた歴史が建物の魅力となる場合があります。

愛知大学記念館は、はじめ、豊橋に誘致された陸軍第15師団の司令部として建てられました。師団とは戦略を遂行できる編成単位で、第15師団は日露戦争後に増設されました。兵数1万人、関係者を合わせると2万人が街へ入植することになるため、各地で誘致合戦が行われました。豊橋が選ばれたのは、満州に似た地形が演習に適していたからだといわれています。

これを機に豊橋の街は道路整備や路面電車

の敷設、電気、上下水道などのインフラ整備が進み、師団の建物は洋風建築で建てられたため、豊橋にそれが広がるきっかけになりました。現在、愛知大学内には司令部を含め、6棟の建物が残されています。

大正14年、第15師団が廃止されると、建物は陸軍教導学校などに引き継がれました。

司令部は木造2階建てで、中央にペディメントの載る玄関がつき、白いペンキの塗られたド



名物企画の平松礼二展覧会

イツ下見板の外壁に瓦屋根が葺かれています。建物は南面していますが、コの字の平面に中廊下型の構成で、庁舎建築のプランとなっています。

館内に入ると、趣のある階段のほか、いたるところに木製と漆喰の建て付けが残り、往時を偲ばせています。

東亜同文書院から愛知大学へ

愛知大学の前身は東亜同文書院といい、明治34年に上海で開学したビジネススクールでした。創設に尽力した東亜同文書院初代会長の近衛篤磨は、欧州列強に対抗する東アジア構想のため、日清間での教育・文化交流と人材の育成を推進しました。

やがて終戦を迎え、東亜同文書院は本国での再開をめざしますが、GHQの意向で頓挫。戦中に内閣総理大臣を務めた近衛文麿の存在が影響したともいわれています。文麿は篤磨の長男でした。その後、名称を「知」を「愛す」を理念に「愛知大学」と変更して認可を得て、豊橋の旧第15師団の施設が提供されました。

愛知大学には、東亜同文書院時代に収集した膨大な資料が集められ、その一部は記念館

1階で公開・展示されています。中には、当時の日本と東アジアの関係を伝える貴重な資料が、いまだ手つかずで眠っているといえます。

平松礼二画伯特別展覧会

愛知大学記念館には、期間限定の名物展覧会があります。

国内外で高く評価されている日本画家の平松礼二は同様の卒業生で、毎年11月15日前後に展覧会が開催され、多くの人々が詰めかかっています。

おおらかな空間に色とりどりの屏風絵が展示される様子は、木漏れ日の差すキャンパスとあわせて、とても艶やかです。



2階旧学長室

1908年 明治41年

木造2階建て

〔設計〕臨時陸軍建築部

豊橋市町畑町1-1

<http://edu.aichi-u.ac.jp/tao/>

※見学可 月／金／10時～16時 土／10時～12時

休館日／日曜日 祝日、創立記念日、夏期・冬期休暇期間



道場内観。窓から差し込む光で混構造のトラスが美しく浮かび上がる

photo: Ryota Murase

旧愛知県岡崎師範学校武道場

屋根架構が美しい、セセッション風の旧武道場



セセッション風の外観

架構の美
構造はぶつう、建物を支える裏方的な存在ですが、時に空間の主役となる場合があります。旧愛知県岡崎師範学校武道場は、木組みと鋼材の張り巡らされたトラスの架構が主役の建物です。

師範学校について

師範学校は教員を養成する学校で、明治5年の「学制」の公布に基づき設立されました。当初は「学制」で区分された大学区ごとに設置が推進されましたが、後に各府県に移管されます。

愛知県では明治6年に愛知県養成学校が設置され、それを第一として、同32年に岡崎に第二師範学校がおかれました。明治35年に現



壁と木組みのディテール

過渡期の造形
外観を眺めると、小ぶりに姿に驚きます。棟までの高さは7メートル程で、ぶつうの2階建ての住宅と同じくらいです。ただ外壁が鉄筋コンクリート造のため、がっちりした印象をうけます。細部の造形には、柱型と柱頭に幾何学的な装飾が付き、壁面を飾っています。これは19世紀末のウィーンで興ったセセッションやアール・デコのデザインを彷彿とさせます。他の学校にも同じような線形の柱頭があることから、設計を担当した愛知県営繕課に共通の型があったのだと思います。道場内に足を踏み入れると、印象は一変します。ひろびろと開放された空間には木組み

在地へ移転し、校舎や寄宿舎、附属小学校が建てられました。武道場は剣道部の活躍を受けて大正末期に建設されています。ちなみに、この頃の愛知の県立中学校でも同様の武道場が建てられ、半田高校や西尾高校に現存しています。現在この建物は、愛知教育大学附属特別支援学校内にありますが、耐震性能が不足しているため、使用されていません。

この小屋組みは鉄筋コンクリート造の施工技術の揺籃期のもので、屋根架構が木造トラスと鋼材を合わせた混構造でつくられたことは、今では貴重な見どころとなっています。



本来の正面入り口

1926年(大正15年) / 1966年(昭和41年)改修
鉄筋コンクリート造平屋建て
【設計】愛知県営繕課
岡崎市六供町八貫1-1
※非公開

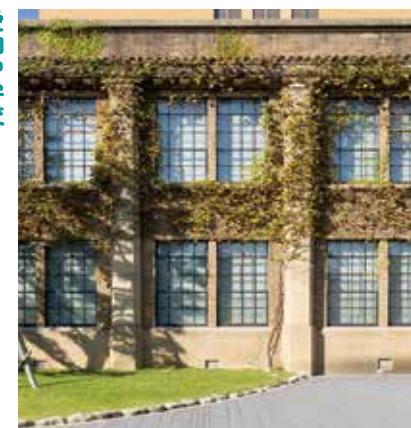


photo: nawoko kato

夕日に染まるファサード。スクラッチタイルにツタの這う美しい外観

愛知学院大学楠元学舎

ツタの這うファサードが美しい、旧制中学校校舎



庇、柱、窓、間柱、基礎部が調和する壁面

愛知中学校

名古屋の中心を走る広小路通を東へ、昭和塾堂のそびえる城山八幡宮の側に、愛知学院大学楠元キャンパスがあります。

門の正面のツタの這う建物は、昭和3年に鉄筋コンクリートで造られた同校の前身の愛知中学校の本校舎です。

愛知学院大学は、曹洞宗の僧侶養成学校に始まります。明治維新後の廃仏毀釈で打撃を受けた仏教界は、それを乗り越える道を布教と教育活動に求めました。その後、大正14年の中学校令の発足に伴い、一般の子弟も受け入れる愛知中学校へ改称されました。

ファサード解題

愛知学院大学楠元学舎の一番の見どころは、ファサードの美しさです。南面した片廊下型は他の校舎と同じですが、前面には庭を配し、運動場は校舎の北側に設けられました。

正面の幅は72メートル。中央には玄関ポーチが付き、その上にペディメントをかたどった壁が立ち上がります。また両端を突き出し



2階のホール。軒のある部分が以前の外壁

て、横に長いファサードを引き締めています。細部を見ていきましょう。明るい茶系のスクラッチタイルが全面に張られています。古典主義建築を思わせるどっしりした柱が基礎部から伸びて1階と2階をつなぎ、その間にはスチールフレームの大きなガラス窓が並びます。また、柱の角をカットし、間柱にスクラッチタイルを張ることで、壁面の存在感がいつそう増しています。赤いスペイン瓦の葺かれた浅い庇も、壁面の彩りに華を添えています。

設計者の佐藤三郎は壁面のデザインが得意だったと伝えられますが、装飾のバランスや陰影、素材の扱いなどに、その力量をうかがい知ることができます。

昭和9年、本館のすぐ隣に、佐藤が設計した同じ壁面デザインの講堂が建てられました。が、残念なことに戦災で焼失しました。

大改修のポイント

平成28年、老朽化に伴い大規模な改修と増築が行われ、建物は大幅に姿を変えます。ただ、外観に関しては当時の姿を壊さないように細心の注意が払われました。スチールサッシュはそのまま残し、壊れたス

クラッチタイルは新たに作り直して補修されています。

館内の2階には、校舎裏側の外壁を取り込むかたちで増築された興味深いホールがあります。白色で統一された広い空間には、愛知学院大学の歴史を紹介するパネルが展示されています。

夕暮れ時、キャンパスの目の前まで迫る住宅地の中で、夕日を浴びて立ち尽くす校舎の姿は、思わず見惚れる美しさです。



側面の階段塔。手すり壁の造形が面白い

1928年昭和3年 / 2016年平成28年改修
設計 佐藤三郎
鉄筋コンクリート造2階建て
名古屋市千種区楠元町1-1-100
https://www.aig.ac.jp/access/kusumoto_sunori/
※見学可

圖計設門正校學
壹史匠務貳尺縮

門柱

大正期に建てられた愛知の県立中学校（現在の高校）では、校舎は共通の図面を元に設計され、門柱もそのスタイルをとっている。この青図は津島高校に残されたもので校名は表記されず、他校と共有されていたと思われる。

圖面正



column

昭和塾堂

【肩書のない名建築】

名古屋にはまだ文化財の指定を受けていない素晴らしい建築があります。その筆頭が昭和塾堂です。

昭和塾堂は、昭和改元の記念に愛知県が建てた青年の修養道場で、旧末森城跡に開かれた城山八幡宮のある丘の中腹に建設されました。ここでいう青年とは、村々の地域活動を担ってきた若衆組をさし、大正ごろから県が主導する教育機関に組み込まれました。それらの修養大会や講習会として使用されたのが昭和塾堂です。

建物を前にしてまず驚くのが、その大きさです。そびえたつ四層の八角堂は日本の古建築を参考にデザインされ、そこから三方に講堂や教室、食堂の翼棟が広がり、平面・立面が「人」の字となる類例のないフォルムになっています。また地階の炊事場の床には割れたタイルが乱張りされていて、厳かでも美しい空間となっています。

設計は愛知県営繕課の酒井勝、足立武郎、黒川巴喜、尾鍋邦彦ら。彼らはこのあと、東海学園大講堂の設計に取り組んでいます。鉄筋コンクリート造の巨大な建物は、近隣にある愛知学院大学の校舎に使用されていましたが、現在は空き家となっています。

名古屋市庁舎や愛知県庁舎に先じる帝冠様式風の名建築は、いま新しい活用の道を模索しています。





photo:nawoko kato

津島高校の門柱。細い道沿いに立ち、不思議な存在感を示している

愛知県立旧制学校の門柱たち

13+1本の、旧制学校のかたちを残す登録有形文化財



津島高校全景。本校舎まえに校門が見える

ちよっと変わった登録文化財

愛知の登録有形文化財には、ちよっと変わった建物があります。

それは県立高校の門柱です。平成29年に13校の門柱が一度に登録文化財になりました。

明治の終わりから昭和のはじめにかけて建設された県立の旧制中学や高等女学校、農商学校などの門柱は、本校舎と共通したデザインであることが多く、本校舎の多くが姿を消してしまっただけで、当時の学校の姿を残す大切な文化財です。

セセッション風の門柱

13ある門柱の中には、同時期に建てられ共通のバターンを持っているものがあります。設計を担当した愛知県営繕課の技師たちは共通の図面から門柱を計画したと考えられ、例えば瑞陵高校や刈谷高校、西尾高校などは、同じセセッション風の柱頭をしています。

そのひとつ、津島高校の門柱は、鉄筋コンクリート造の2本の主門柱と2本の脇門柱からなり、高さはそれぞれ3メートル46センチと3メートル12センチもあります。

旧制第三中学として同地に誘致された津島高校は、現在でも田んぼに囲まれたのだ



大中肇設計の旧講堂

かな風景にあります。津島神社へつながる天王川公園の松が並ぶ堤防の先に、迫力のある門柱がひっそりと立っています。以前は門の正面から右にずれた場所に、門柱と同じセセッション風の装飾があらわれた鉄筋コンクリート造の本校舎がたっていました。門

に入って左手には愛知県営繕時代の大中肇が手掛けた旧講堂が残っています。ちなみにセセッションとは、19世紀後半のウィーンで興った芸術運動で、本国ではゼツェッションといい、日本語訳すると「分離派」を意味します。過去の芸術様式を捨てて新しい芸術様式をめざすから分離派です。日本では大正前期に建築家の武田五一によって紹介されました。セセッションという英語読みも武田が広めたものです。

実は武田は、大正7年から9年にかけて名古屋高等工業学校(現名工大)で学長を務めていたため、その影響を受けた人々がセセッションをデザインに取り入れた可能性があります。

街の風景をつくるもの

もうひとつ、紹介したい門柱があります。名古屋大学医学部キャンパスと隣接する鶴舞

公園のあいだの並木道に立つ、旧愛知県立医学専門学校の門柱です。公園を散策する人や病院に通う人、大学に向かう人たちが行き交う並木道の脇に佇む門柱は、そこから伸びるスクラッチタイルの外壁とともに、すてきな街並みにひっそりと貢献しています。



photo:Ryota Murase

旧愛知県立医学専門学校の門柱

- 安城農林高校 / 明治36年頃
- 半田商業高校 / 大正10年
- 刈谷高校 / 大正12年
- 鶴城丘高校 / 大正14年頃
- 惟信高校 / 昭和4年頃
- 西尾高校 / 昭和5年頃
- 旭丘高校 / 昭和13年
- 旧愛知県立医学専門学校 / 大正3年
- 岡崎高校 / 大正前期
- 津島高校 / 大正12年頃
- 瑞陵高校 / 大正13年頃
- 岩南高校 / 昭和4年頃
- 小牧高校 / 昭和4年
- 岩津高校 / 昭和12年

明治村の 学校建築たち



【学校建築の宝庫】

博物館明治村は、古い学校建築の宝庫です。

まず入り口で待ち構えてくれるのが、名古屋市瑞穂区にあった第八高等学校のレンガの門柱です。赤いレンガと花崗岩の立ち姿が、来館者を一気に明治の世界に連れて行ってくれます。

昭和40年に開館した明治村は、高度経済成長期に失われていく建物を移築・保存する目的で設立された野外博物館です。その多くが取り壊される寸前のもので、また当時はあまり価値が認められていなかった市井の建物を保存したことも特徴です。本書で取り上げている学校建築はまさにそんな建物で、明治村には同様の校舎がいくつも移築されています。

数ある中からひとつだけ紹介すると、第四高等学校物理化学教室がおすすめです。設計したのは文部省技師の山口半六と久留正道で、久留は「学校建築図説明および設計大要」をまとめた人物です。この建物もそれに合致し、またモダンな階段教室も見どころです。

山口も久留も西洋建築を深く学び、その理論や研究に基づいて「大要」を著しました。物理化学教室のシンプルながらも美しい姿を見ると、彼らが創り上げた学校建築の礎がどれだけのクオリティを持っていたのか、思いを馳せずにはいられません。



飯田喜四郎先生 特別インタビュー 学校建築に思うこと

今回は愛知県にある古い学校を取り上げていますが、こうして改めて見てみると、どれも良い建物ばかりですね(笑)

旧多米小学校は建てられた時期も面白いですし、雰囲気もとても良い。また田峯小学校は、地域の文化と合わせてすごい学校だと思います。滝学園本館も今でもきれいですし、本当に良く残してくれていると感心しています。

博物館明治村にも学校建築はいくつか移築されていますが、それらは昭和30年代後半から40年にかけて、ほとんど取り壊されていった建物だったからです。当時は、古い建物などの程度残っているのかもわかっていたいなかった。逆にいえば、壊されてしまっても気がつかなかったのです。あとになって気がついてももう遅い。

明治村に残る第四高等学校の物理化学教室や武術道場については、明治村創設の功労者の建築家谷口吉郎と

名鉄の副社長土川元夫の母校だったことも大きかったと思います。彼らにとっては思い出の学び舎だったわけですから、いっそう熱が入っていました。

私は、関東大震災以降の昭和7年から小学校に通ったため、鉄筋コンクリート造3階建ての校舎で過ごしました。片廊下型のプランや教室のスケールは木造校舎を踏襲したものでした。

校舎はコの字型で配置され、その一辺は講堂と唱歌室、屋外プールを設けて校外と遮断していました。戦前は祝日が多く、とはいえ休みではなくて、講堂で校長が奉安室から取り出した教育勅語を読み上げ、その後で1時間くらい講話をします。それが終わるとお供物くもつという菊の御紋の入ったお菓子が配られるのですが、あまり美味しくはなかった(笑)

今後の日本は少子化が進み、廃校になる学校はますます増えていくことになると思います。それら校舎をいか

に再利用するのか。愛知県では岡崎が早くからその問題に取り組んできました。というよりも、廃校になった校舎の再利用を熱心な地元の住民が始めた、というのが正しいでしょう。彼らの活動が行政を巻き込み、その動きに呼応して地元の大学が関わることで、社会教育などの場として広がりを見せました。

地元に着したコミュニティと連携をとることは、地域で文化活動をめざす大学などにとっても、また文化事業の展開を望む地方行政にとっても、何よりも大事な核になります。そして、その核となるのは、地元の人々にとって拠り所となっている思い出深い学び舎なのだろうと思います。



飯田 喜四郎

1924年東京生まれ。名古屋大学名誉教授。東京大学在学中にフランスへ留学。また博物館明治村の館長を長年務めた。



あいちのたてももの博覧会

まちがミュージアムになる日

愛知県では毎年秋になると、国登録有形文化財の建物を特別公開するイベント「あいちのたてももの博覧会」を開催しています。

公開する建物は、ここで紹介した学校の建物以外に、住宅、社寺、教会、その他の産業にまつわる建物や公共施設など多岐にわたります。

公開にあわせて、所有者や建築の専門家たちによる建物ガイドも行い、普段は非公開の場所も見学できるのが特徴です。

また、古い町並みを巡るツアーや特殊なテーマのツアー、子どもが建物ガイドをしてくれるツアーに、音楽の演奏やワークショップなど、多彩なイベントも同時に開催しています。

いつもは立ち入ることのできない建物に足を踏み入れ、美しい室内装飾に身を浸し、それらを通じて地域の歴史に触れた時、建物はまるでまちのたからものように見えてくることでしょう。

秋の陽気につつまれて、まち全体がミュージアムになる日を楽しんでみてはいかがでしょうか？

※あいたて博の開催は10月11日の土日曜日を予定しています。

あいちのたてもの まなびや編

2020年3月26日発行

発行者 愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会 <http://www.aichi-tobunkai.org/>
 会長 小栗 宏次
 【事務局】名古屋市中区錦三丁目6番15号先
 名古屋テレビ塔株式会社内 info@aichi-tobunkai.org

編集・企画 株式会社 都市研究所スペースア

執筆 はじめに 飯田 喜四郎
 本文 村瀬 良太

写真撮影 かとうなをこ/水野晶彦/熊本仁志/竹内久生/伊藤朋香/みなちよむ

写真提供 博物館明治村、愛知大学

制作協力 筧 清澄

題字 水谷 月菜

イラスト・構成 村瀬 良太

デザイン 墨 昌宏 (有限会社エビスワード)



本冊子は「平成31年度文化庁文化芸術振興費補助金
 (地域文化財総合活用推進事業)」により作成しました。

国登録有形文化財とは

平成8年の文化財保護法改正により創設された文化財登録制度に基づき、文化財登録原簿に登録された有形文化財のことです。

それまでは文化財指定制度に基づく重要文化財(中でも、世界文化の見地から価値の高いものが国宝)が指定され、貴重な建物が手厚く保護されてきましたが、その数は多くなく、急激な都市化の進展などにより、近代の建造物はその建築史的・文化的意義や価値を十分に認識されないうまま取り壊される例が相次ぎました。それを決定づけたのが平成7年の阪神・淡路大震災です。震災による被害を受けた多くの未指定文化財が取り壊されてしまいました。

その反省にたち、国レベルで重要なものを厳選する重要文化財指定制度を補い、より緩やかな規制のもとで、幅広く保護していく制度として文化財登録制度が創設されたのです。

登録の基準は、原則として建設後50年を経

過したもののうち、

- ①国土の歴史的景観に寄与しているもの
- ②造形の規範となっているもの
- ③再現することが容易でないもの

のいずれかに該当するものとなっています。

所有者の同意のもとに登録されるもので、登録されると相続税等の減免や保存・活用に必要となる修理等の設計監理費などに対する補助を受けることができます。重要文化財と比べると補助は大きくはありませんが、厳しい規制がある指定文化財とは異なり、外観を大きく変えなければ改修や改装も認められており、有効に活用していくことが期待されています。

なお、令和2年3月1日現在、全国で12,443件が登録され、愛知県は519件(全国5位)となっています。



登録文化財のプレート

愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会とは

愛知県内の国登録有形文化財の所有者を中心とする会(略称:愛知登文会)で、登録文化財の保存・活用を推進することを目的に、平成23年6月に設立されました。

平成23年度より文化庁文化芸術振興費補助金を受けて活動を行っており、本書の作成もその一つです。この冊子を通じて、愛知県内にある様々な登録文化財の魅力を知っていただき、歴史的建造物の保存・活用にご理解・ご支援いただければ幸いです。

愛知登文会では、このような活動を進めるにあたり、全国の登録文化財の所有者が連携して取り組んでいくことが重要だと考え、全国の所有者の会のネットワークづくりにも取り組んできました。令和元年6月には、全国で活動する9つ(秋田、群馬、東京、神奈川、愛知、三重、大阪、京都、和歌山)の所有者の会が集い交流する「全国登文会フェスタ」を愛知で開

催し、この機会にあわせて、登録有形文化財全国所有者の会(全国登文会)が設立されました。全国登文会では、所有者間の連携、交流、情報交換を通じて登録文化財の保存・活用を進めることを目的としています。

全国の文化財所有者の皆様や関係の皆様と連携しつつ、この愛知から登録文化財の保存・活用の輪を大きく広げていくことができると考えています。

愛知登文会 会長 小栗宏次



全国登文会設立総会の様子(小栗家住宅)